河越館跡（川越市）

ここを右手に曲がると「河越館跡史跡公園」がある

河越館跡
河越館跡は、平安時代の終りころから南北朝時代のはじめまでの約二百年の間、武蔵国で大きな勢力を誇った豪族（ごうぞく）の河越氏の居館跡です。
河越氏は、桓武平氏（かんむへいし）の流れを汲む一族で、平安時代の終りころ、この地に根を張り、河越氏を名乗りました。
治承四年（一一八〇）、源頼朝が伊豆で挙兵すると、河越氏は初め敵対しましたが、後に頼朝（よりとも）軍に加（くわ）わって平氏追討（ついとう）に参戦します。このころの河越氏の勢力は、義朝の妾（めかけ）腹の頼朝の弟義経（よしつね）の妻に選ばれたことからも推（お）し量ることができます。おそらく、奥入衣の日、義朝の妾は、当然の者たちと河越館から都の義経のもとへ同かったことでしょう。ところが、後に義経と頼朝の仲違いから、義経縁者である当代館主で、義朝らは滅ぼされ、河越氏の勢力はここで断たれる結果のことになったのです。しかし鎌倉時代中ごろ、武蔵国に再び力を回復しつつあります。
鎌倉時代になると、数の中に時宗（じしゅう）寺院が開かれ、河越館は大きく変貌します。後に時宗十二代上人の遺骨が安置され「南無阿弥陀仏」が記されたお守り札（ふだ）と書かれた宗教（しゅうきょう）を配り大勢の人々で賑わうこともあったようです。
建武元年（一三三四）、新田河越氏が武蔵国に反旗を翻しますが、あっさり敗れてしまいます。これ以降、河越氏は政治的に表舞台からは姿を消し、河越氏と地の関係も薄る思たることになります。
戦国時代になると、関東管領上杉氏が上戦場の屋敷に対抗するために、かつての河越館をさらなる二の曲輪に強化し、上杉氏を備えたことが知られます。発掘調査の成果に基づいて、この時の遺構を考えられます。
昭和五十九年十一月吉日建立　川越市教育委員会

国指定史跡

河越館跡（かわごえやかたあと）

河越館跡は、平安時代の終りころから南北朝時代の中ごろまでの約二百年の間、武蔵国で大きな勢力を誇った在地領主の河越氏の居館跡（きょかんあと）です。

河越氏は、桓武平氏秩父氏（かんむへいしちちぶし）の流れを汲む一族で、平安時代の終りころ、この地に館を構え、河越氏を名乗りました。

治承（じしょう）四年（一一八〇）、源頼朝（みなもとのよりとも）が伊豆で挙兵すると、河越氏は初め敵対しましたが、後に御家人となって平氏討伐軍に参戦します。このころの河越氏の勢力は、重頼（しげより）の娘が源頼朝の弟義経（よしつね）の妻に選ばれたことから推し量ることができます。おそらく輿入れの日、重頼の娘は、お供の者たちと河越館から都の義経のもとへ向かったことでしょう。ところが、後に義経と頼朝の仲違いから、義経縁者である事が禍（わざわい）して、重頼らは滅ぼされ、河越氏の勢力はここで一時衰えます。しかし鎌倉時代中ごろ、高野山に町石（ちょういし）を建てたことで知られる経重（つねしげ）のころには、かつての勢力を回復しつつありました。

鎌倉時代の後半になると、館の中に時宗常楽寺（じょうらくじ）が開山され、河越館は大きく変貌します。後に時宗十五代上人尊恵（そんね）が訪れ「南無阿弥陀仏決定往生（なむあみだぶつけつじょうおうじょう）六十万人（ろくじゅうまんにん）」と書かれた念仏算（ねんぶつふだ）を配り大勢の人々で賑わうこともあったようです。

応安（おうあん）元年（一三六八）、突然河越氏や高坂氏ら「平一揆（たいらいっき）」が河越の館にたてこもって鎌倉（かまくら）府に反旗を翻しますが、あえなく敗れてしまいます。これ以降、河越氏は政治の表舞台からは姿を消し、河越氏と館の関係も幕を閉じることになります。

戦国時代になると、関東管領山内上杉氏（かんとうかんれいやまのうちうえすぎし）が川越城の扇谷上杉氏（おうぎがやつうえすぎし）に対抗するために、かつての河越館を含むこの周辺に陣所（上戸陣）を構えたことが知られます。現在指定地の西に残る土塁は、その頃の遺構と考えられます。

昭和五十九年十二月六日指定

川越市教育委員会

史跡公園に向かいます

この高まりは土塁の跡です

土塁についてお話があります

先生のお話に聞き入る聴講生の皆さん

更に歩きます

土塁に執着される先生

このあたりは墓域と考えられる区画（7）

史跡公園

西
東
河越館跡周辺の歴史

河越館跡は東山道武蔵路と入間川という幹線道路と水運の交わった要所に存在することが分かる

1 河越館跡：河越氏は桓武平氏の流れを汲む名族です。河越重頼は源頼朝を助け、一ノ谷の戦いでも活躍しました。重頼の娘は源義経の正妻に選ばれ、京都にいた義経の元へ輿入れしたことから、地元では“京姫（郷姫）”として親しまれています。今までの発掘調査の成果では、河越氏の屋敷のほか複数の区画が確認されました。しかし、館の主屋となる建物は未確認であり、館は現在の入間川付近まで広がっていたと想定されます。

2 常楽寺：河越氏の持仏堂から発展したと言われる時宗の寺院で、河越氏が衰退した後に寺域を広げたと考えられています。現在も史跡指定範囲の南側にあり、河越氏の繁栄を今に伝えています。

3 新日吉山王宮：河越氏はこの地に進出して間もなく、所領を後白河上皇が創建した京都の新日吉社に寄進しました。これをきっかけに荘内には新日吉山王宮が勧請されました。それが現在の上戸日枝神社と考えられています。

4 銅鐘：「武蔵國河肥庄　新日吉山王宮　奉鋳椎鐘一口三尺五寸　大檀那平朝臣経重　大勧進阿闍梨円慶　文應元年　大歳庚申十一月廿二日　鋳師丹治久友　大江真重」という銘文を有するこの銅鐘は、文応元年（1260）に鋳造され、河越経重が新日吉山王宮（上戸日枝神社）に奉納したものです。作者の一人丹治久友は、鎌倉大仏の鋳造にも関わった当代一流の鋳物師です。［養寿院蔵　高さ97cm　国指定重要文化財（工芸品）］

5 牛塚古墳：全長42m、横穴式石室を主体部とする７世紀初頭の前方後円墳です。追葬が行われ、金銅製の指輪など珍しい副葬品が出土しています。後に入間郡家設置にも大きく関わったと思われる有力豪族の古墳と考えられます。

6 入間郡家：霞ヶ関遺跡は古代の入間郡家（入間郡の役所）が設置されていた有力な候補地となっています。大型の掘立柱建物跡が規則的に配置されているほか、畿内を始め遠隔地の土器類や、役人が使用した帯金具・円面硯なども出土しています。

7 入間川水運：この地域は古代より入間川を利用した水運が発達したと考えられています。古代入間郡家（霞ヶ関遺跡）では東海地方や常陸国といった遠隔地の土器が出土し、中世の河越館跡では常滑や瀬戸の陶器、中国から輸入された磁器等が大量に出土しています。これらは水運で運び込まれたものと考えられます。

8 東山道武蔵路：7世紀の終わり頃、都を起点に整備された駅路の一つである東山道のうち、上野国新田郡（現群馬県太田市）から武蔵国府（現東京都府中市）に至る枝道です。宝亀２年（771）に駅路から外されますが、その後も往来は絶えることなく、中世には鎌倉街道の一部として使用されたと考えられています。

坂戸
大堀山館跡
下広谷館跡群
古海道東遺跡
下小坂古墳群
254
上戸日枝神社
常楽寺
東明寺
河越館跡
霞ヶ関遺跡
入間郡家推定地
川越城跡
養寿院
喜多院
16
善仲寺館跡
古尾谷氏館跡
牛塚古墳
的場古墳群
川越
仙波氏館跡
仙波古墳群
川越線
八幡前・
若宮遺跡
山王塚古墳
灌頂院
南大塚古墳群
岸町横穴墓群
407
砂久保陣場跡
上福岡
東山道武蔵路推定ルート
入間川
16
狭山市
254
西武新宿線
入間市

前方に井戸跡(3)や石を葺いた霊廟と思われる塚跡(4)が見える

←

↑
井戸

↑
塚

↓(13)鎌倉街道　　↓(3)井戸跡
↓(7)墓域と考えられる区画　　↓(4)塚跡

↑(10)常楽寺　↑(11)入間川　　↑(2)掘立柱建物跡

これまでの発掘調査の積み重ねから堀や井戸などが確認され、河越館の姿が少しずつ明らかになってきました。しかし、具体的な建物の姿や当時の景観などまで類推することは困難です。そこで調査成果と当時の絵画資料などを参考として14世紀半ば頃の河越館の様子をイメージしてみました。

発掘調査では上幅約4m、深さ約2mの堀で囲まれた区画(1)に、掘立柱建物(2)や井戸(3)、石を葺いた霊廟と思われる塚(4)が確認されています。この区画は河越氏の屋敷区画の一部と考えられています。区画は道路(5)に囲まれ、南側には出入り口として土橋(6)があったと考えられます。

堀区画と道路を挟んで西側に隣接する位置には、土塀あるいは板塀で囲まれた墓域と考えられる区画(7)が存在します。また、北側にも堀が確認されており、こちらにも堀で囲まれた区画(8)が存在したようです。

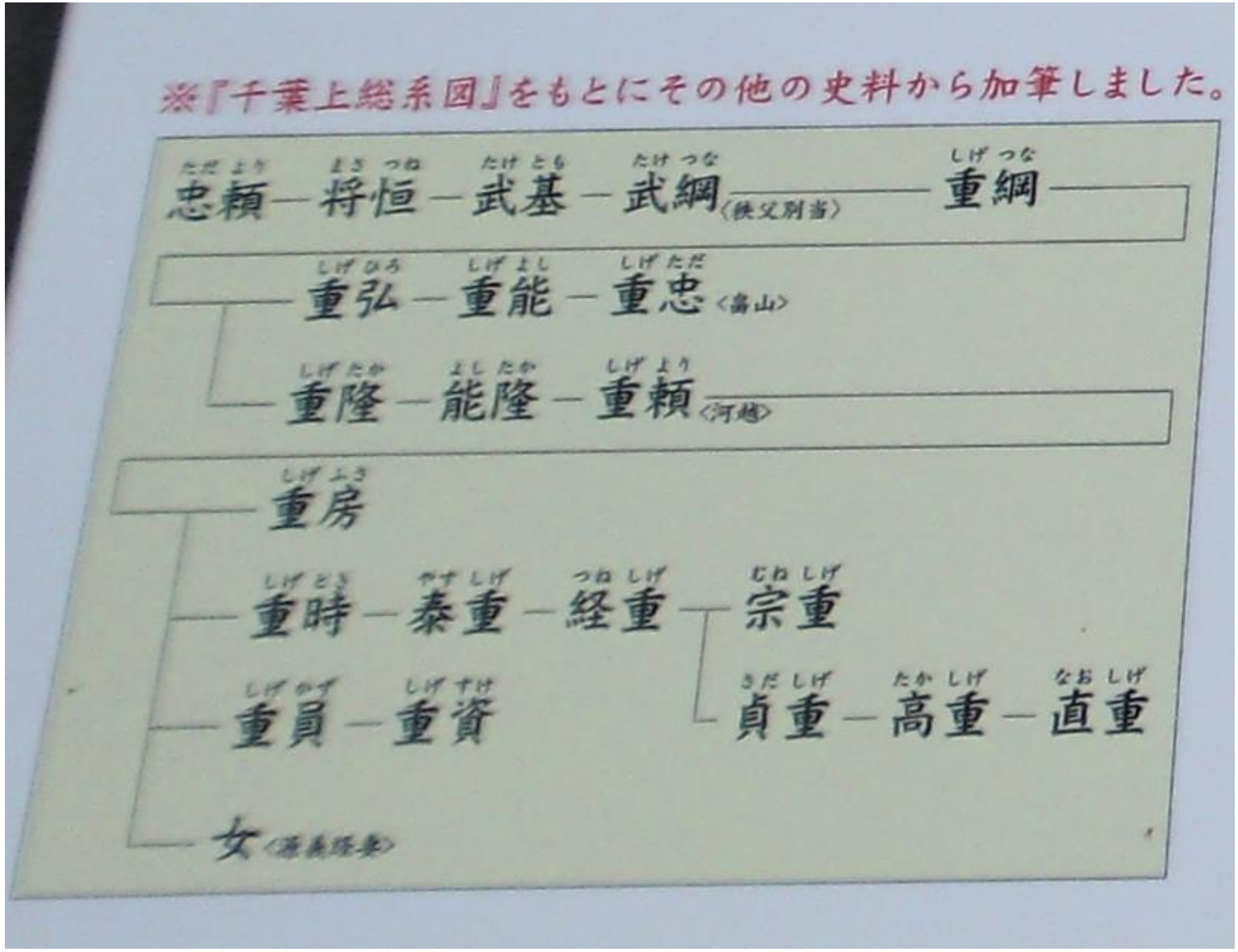
発掘調査された範囲では、残念ながら主屋となる建物は見つかっていませんが、古い時代の遺構・遺物が集中する入間川寄りの場所を想定しています(9)。また、館の南には河越氏の持仏堂から発展した常楽寺(10)があります。

周辺に目を向けると、館の東隣には水運で重要な役割を果たしたであろう入間川(11)が流れており、西に見える新日吉山王宮(12)の近くには鎌倉街道(13)が通過していました。河越館が水・陸の交通の流れを押さえた交通の要衝に立地することがわかります。

このように、河越館は、主屋や墓域など、役割の異なる複数の区画によって構成されていたようです。区画の周囲を廻る道路や鎌倉街道、入間川などによって様々な人や物資、情報が集まってきた河越館は、周辺地域の中心となる都市的な場でした。応安元年(1368)、平一揆が敗れ、河越氏が歴史の表舞台から姿を消した後も、寺域や戦の陣所として利用され続けたのです。

河越氏について

河越氏は、桓武平氏流の秩父氏を祖とする、関東を代表する名族です。平安時代の終わりごろには、「河越」を名乗り、南北朝時代まで活躍しました。その間平氏・源氏・北条氏・足利氏という時の権力者と密接な関係を築きました。とりわけ鎌倉初期、河越重頼の娘は源義経の正妻に選ばれており、当時の河越氏がいかに有力な武士と考えられていたのかよくわかります。また、平安時代の終わりから鎌倉中期まで河越氏は、代々武蔵国の筆頭格である留守所惣検校職という在庁職を認められ、南北朝期には相模守護にまで任命されました。一方、河越氏は、後白河上皇が永暦元年(1160)に創建した京都新日吉社に土地を寄進して、河越荘とし、領主経営を展開しました。しかし、応安元年(1368)、平一揆を組織した河越氏は、鎌倉府と対立し、河越館での戦いに敗れ、表舞台から姿を消してしまいました。



← 畠山重忠

← 河越重頼
（常楽寺を開基）

↑
女：京姫/源義経の正妻

日本史年表・河越館に関する年表

区分	時代	西暦	和暦	日本の主な出来事・遺跡	河越館跡に関わる出来事	河越館跡の様子
原始	旧石器			岩宿遺跡（群馬県）		
原始	縄文			三内丸山遺跡（青森県） 加曽利貝塚（千葉県）		
原始	弥生			吉野ヶ里遺跡（佐賀県） 登呂遺跡（静岡県）		
古代	古墳			各地に前方後円墳が造られる 藤ノ木古墳（奈良県）		
古代	飛鳥	645	大化元年	大化の改新		
古代	奈良	710	和銅３年	都を平城京（奈良）に移す		
古代	平安	794	延暦13年	都を平安京（京都）に移す		
古代	平安	935	承平５年	平将門の乱（～940）		
古代	平安	1155	久寿２年	大蔵合戦（源義平、武蔵国大蔵館で叔父義賢を殺害する）	秩父重隆、義賢とともに死去 河越氏、後白河天皇軍（源義朝配下）として参戦	
古代	平安	1156	保元元年	保元の乱		
古代	平安	1159	平治元年	平治の乱		
古代	平安	1160	永暦元年	源頼朝、伊豆に配流される 後白河法皇の法住寺御所に新日吉社創建される	この頃、河越重頼ら比企尼とともに源頼朝を扶助する この頃、河越荘、新日吉社領として立荘される	
古代	平安	1180	治承４年	源頼朝、伊豆国で挙兵 源頼朝、鎌倉に入る	河越重頼、頼朝の軍門に下る 河越重頼の妻（比企尼娘）、源頼家の乳付となる	
古代	平安	1182	寿永元年	源頼家誕生	河越氏ら源義経に従い上洛	
古代	平安	1184	元暦元年	源義経ら、源義仲軍を破り入京 一ノ谷の戦い	一ノ谷の戦いで河越重頼・重房ら活躍する 河越重頼の娘、源義経に嫁すため上洛	
		1185	文治元年	壇の浦の戦い 源頼朝に義経追討宣旨下される	河越重頼、義経縁者により所領没収される 河越重頼殺害される。河越荘は後家尼（比企尼娘）が相続する 義経とともに妻子自害	河越氏の屋敷とし
		1187	文治３年			
		1189	文治５年	藤原泰衡、衣川館の義経を襲撃		
		1192	建久３年	源頼朝、征夷大将軍に任命される		
		1212	建暦２年		入間川洪水により、河越館被害に遭うと伝わる	
		1221	承久３年	承久の乱	河越重員、幕府軍の一員として参戦 河越重員、武蔵国留守所惣検校職に補任される	
		1226	嘉禄２年			

中世	鎌倉	1232	貞永元年	御成敗式目公布	河越経重、河越荘内の新日吉社に梵鐘奉納
		1260	文応元年		河越経重、高野山町石を奉納
		1272	文永９年		
		1274	文永11年	文永の役	
		1281	弘安４年	弘安の役	
		1285	弘安８年	霜月騒動	常楽寺開山智徳死去す
		1320	元応２年		幕府の楠木攻めに河越貞重従軍
		1331	元弘元年／元徳３年	楠木正成挙兵	
		1333	元弘３年／正慶２年	六波羅探題・鎌倉陥落。鎌倉幕府滅亡。建武の新政始まる	
	室町	1338	延元３年／暦応元年	足利尊氏、征夷大将軍に補任される	
		1350	正平５年／観応元年	観応の擾乱	河越直重ら尊氏軍に属して活躍す
		1352	正平７年／文和元年	足利尊氏、武蔵野合戦にて新田軍破る	河越直重、相模守護に任じられる
		1353	正平８年／文和２年		河越直重、国清に従軍。京都の宿所に群盗乱入
		1359	正平14年／延文４年	畠山国清、東国勢を率いて南朝征討のため武蔵国入間川陣より上洛	河越直重、相模守護解任される
		1363	正平18年／貞治２年		義堂周信、河越荘（山田荘）を訪れる
		1367	正平22年／貞治６年		平一揆、河越館に閉じこもる。平一揆敗れる
		1368	正平23年／応安元年	鎌倉公方軍、平一揆を征討する（平一揆の乱）	
		1392	明徳3年	南北朝合一	時宗15代上人尊恵、常楽寺にて賦算
		1417	応永24年	上杉禅秀（氏憲）の乱起こる	
		1438	永享10年	永享の乱起こる（足利義教と足利持氏の対立）	
		1454	享徳３年	享徳の乱始まる（足利成氏、関東管領上杉憲忠を謀殺）	
		1455	康正元年	足利成氏、古河に移座（古河公方誕生）	
		1457	長禄元年	太田道灌、江戸城・河越城を築く	
		1467	応仁元年	応仁の乱始まる（～1477年）	
		1486	文明18年	扇谷上杉定正、太田道灌を相模で誘殺	聖護院道興、常楽寺を訪れる
		1487	長享元年	山内上杉氏と扇谷上杉氏対立始まる	
		1497	明応６年		山内上杉顕定、上戸に陣所を構える
		1502	文亀２年		上戸陣所に連歌師宗祇訪れる
		1504	永正元年		扇谷上杉朝良、上戸陣所にて合戦す
		1537	天文６年	扇谷上杉朝定、北条氏綱に敗れ河越城より松山城に退去	
		1545	天文14年	古河公方足利晴氏・関東管領上杉憲政、北条氏の河越城を包囲	かつての河越荘はほぼ北条氏家臣の所領となる
		1559	永禄２年		
		1560	永禄３年	桶狭間の戦い（織田信長、今川義元破る）	
		1561	永禄４年	北条氏代官大道寺政繁、河越城の城下町整備	
近世	安土・桃山	1582	天正10年	本能寺の変（織田信長、明智光秀に攻められる）	
		1590	天正18年	北条氏、豊臣氏に降伏。大道寺政繁死去。 酒井重忠が一万石をもって川越に封じられる	

機能していた時期

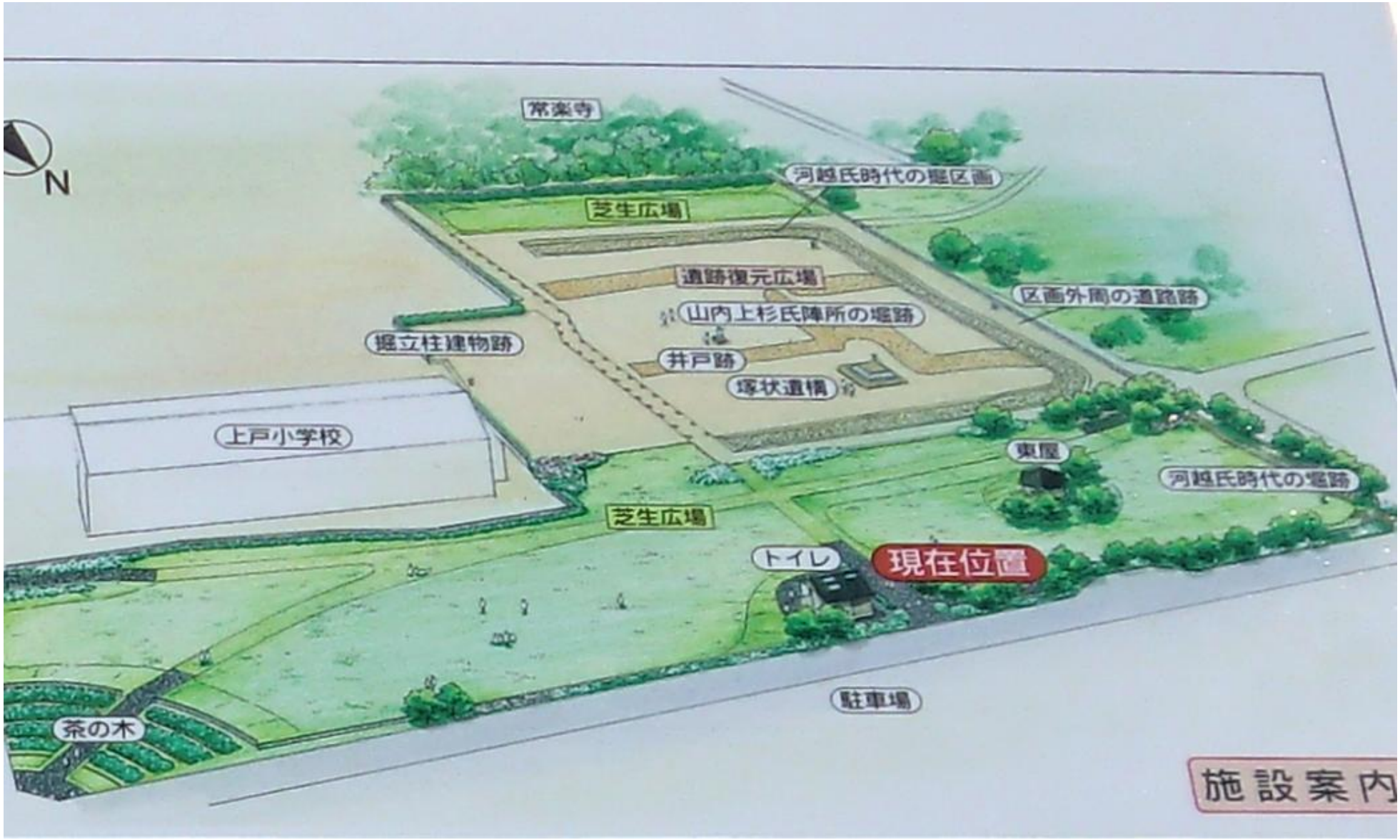
常楽寺の寺域

山内上杉氏陣所

大道寺氏陣所

河越館跡 整備平面図
0
50
100m
国指定範囲
第１期整備範囲
整備予定範囲
遺構個別解説板
入間川
常楽寺
河越氏時代の堀区画
井戸跡
掘立柱建物跡
山内上杉氏陣所の堀跡
上戸小学校
塚状遺構
土塁
河越氏時代の堀跡
茶の木
東屋
トイレ
現在位置

常楽寺
上戸小学校
現在位置
上から見た河越館跡


N
常楽寺
河越氏時代の堀区画
芝生広場
遺跡復元広場
区画外周の道路跡
山内上杉氏陣所の堀跡
掘立柱建物跡
井戸跡
塚状遺構
上戸小学校
東屋
河越氏時代の堀跡
芝生広場
トイレ
現在位置
駐車場
茶の木
施設案内

河越館跡の発掘調査成果

河越館跡では平成20年度までに13回の史跡整備に向けた範囲内容確認調査、11回の各種確認調査が実施されてきました。これら過去の調査成果と文献資料を併せると、河越館跡は下記のように大きく分けて4つの時期に亘って繰り返し利用されてきたことがわかりました。

Ⅰ期：「河越氏」の時代（12世紀後半～1368年）

河越氏が館を構えてから平一揆で敗れ、この地を離れるまでの時期です。「コ」の字型に廻る8号堀跡で区画された内側に、2号掘立柱建物跡・6号井戸跡・39号溝（霊廟か）が確認されています。この区画は建物等の遺構こそ少ないものの、河越氏が活躍した時代でも後半に属する、屋敷地の一部と考えられます。

遺物はかわらけ（儀式や酒宴で使い捨てにされた素焼きの器）、中国から輸入された青白磁の梅瓶といった武士の生活を偲ばせるものの他に、火を受けた痕跡の残る軒丸瓦や磁器が出土しており、平一揆による兵火との関連がうかがえます。

Ⅱ期：「常楽寺」の時代（14世紀後半～15世紀後半）

史跡内に残る時宗の寺院・常楽寺は河越氏の持仏堂が起源といわれ、河越氏が衰退した後に寺域を広げたと考えられています。

この時代の遺構は8号堀区画の西隣（次期整備予定地）で多く検出されています。塀による区画内に、墓坑と思われる土坑群と半地下式の建物群が集中し、板碑や石塔類、茶道具である茶臼・風炉、仏具である銅製花瓶が出土しています。

Ⅲ期：「山内上杉氏」の時代（15世紀末～1505年）

15世紀末には、扇谷上杉氏の河越城を攻略するため、山内上杉氏が陣所を構えました。この陣所に伴う遺構は数多く、26号堀を始めとした規模の大きな堀や地下式坑、方形竪穴等が検出されています。陣所設置の際には常楽寺の寺域を整理し、堀や井戸に板碑等を投棄した状況が見られます。

また、現在も史跡西側に残る土塁はこの時期の遺構と考えられています。

遺物は中国産の青磁・白磁、瀬戸・常滑といった陶磁器類の他、武士の屋敷で使用される火鉢、刀装具等も出土しています。中でも山内上杉氏に関わる時期・地域の遺跡で特徴的に見られる「山内かわらけ」と呼ばれるかわらけも数多く出土しています。

Ⅳ期：「大道寺氏」の時代（16世紀中頃～1590年）

山内上杉氏陣所以後については、遺構・遺物が少なくなり、発掘調査成果だけでは当時の河越館跡の姿は明らかにできません。同様に文献資料も少ないですが、河越城を拠点とした小田原北条氏の重臣・大道寺政繁の墓所が常楽寺内に所在することから、大道寺氏が陣所として整備した可能性が考えられています。

●発掘調査の様子

河越館跡発掘調査箇所平面図
入間川
常楽寺
上戸小学校
土塁
土塁
国指定範囲
第Ⅰ期（「河越氏」の時代）の遺構
0
25m
50m

前方に井戸跡(3)や石を葺いた霊廟と思われる塚跡(4)が見える

こちらは墓域と考えられる区画（7）方向

区画内にあった建物跡
（２号掘立柱建物跡）

８号堀の区画で検出された唯一の建物であり、13世紀後半～14世紀頃の遺構と考えられます。柱穴径は0.3～0.4m、南北３間（約6.4m）の規模を有します。東西に長い建物と考えられますが、建物の大部分が小学校敷地の中へ続くため、東西方向の正確な規模は不明です。

この建物は、屋根を支える柱の間に床板（ゆかいた）を支える束柱（つかばしら）を持つ点、また柱穴に柱を安定させるための根石（ねいし）を伴っている点が特色です。

床張りの建物である点、根石による安定した構造をとる点、そして建物が８号堀区画の中央付近に位置している点を考えると、８号堀区画内部の中心的な建物であった可能性があります。

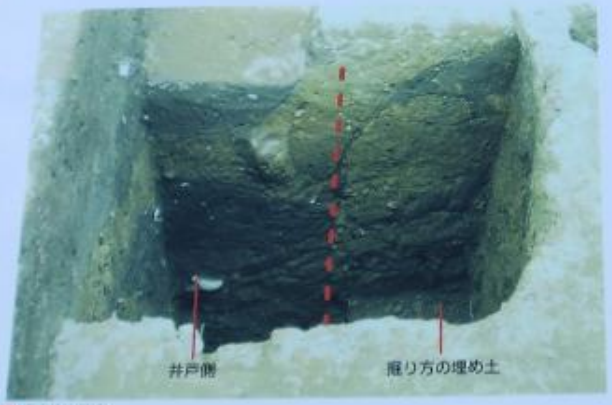
整備では柱の位置をプレート、壁のラインをコンクリートによって平面的に表現しています。

●根石を持つ柱穴

掘立建物跡

井戸跡
（6号井戸跡）

河越氏の屋敷区画（8号堀区画）内部にある井戸跡で、13世紀後半～14世紀頃の年代が考えられます。約2.5m四方の方形範囲を2.5m以上掘り窪めた中央に、板材を方形に組み上げた約1.2m四方の井戸側（水を汲み上げる部分）を造り、周囲を埋め戻すという工法を採用しています。当時の武蔵国では素掘りの井戸が主体であり、この井戸のように大きな掘り方（余掘り部分）で、板材を組み合せた井戸側を有するタイプの井戸は希少でした。



● 井戸跡の断面

井戸跡

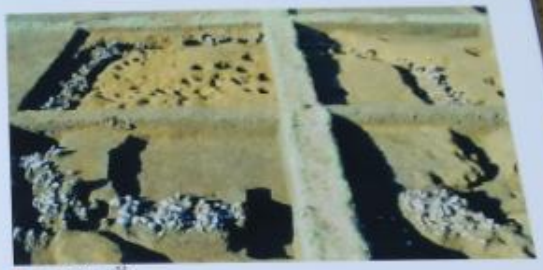
塚状遺構
（39号溝跡）

発掘調査では、幅0.7～1.0m、深さ0.3m程度の溝が一辺約7.6mのやや丸みを帯びた方形に巡り、溝の中には10～20cm程度の礫が大量に流れ込んでいる状態で確認されました。出土遺物に蔵骨器としての使用が考えられる常滑焼の壺や在地産の捏ね鉢（蔵骨器蓋に転用か）等が見られることから、周囲を溝で囲まれ、盛土に礫を葺いた塚状の遺構であったと考えられます。

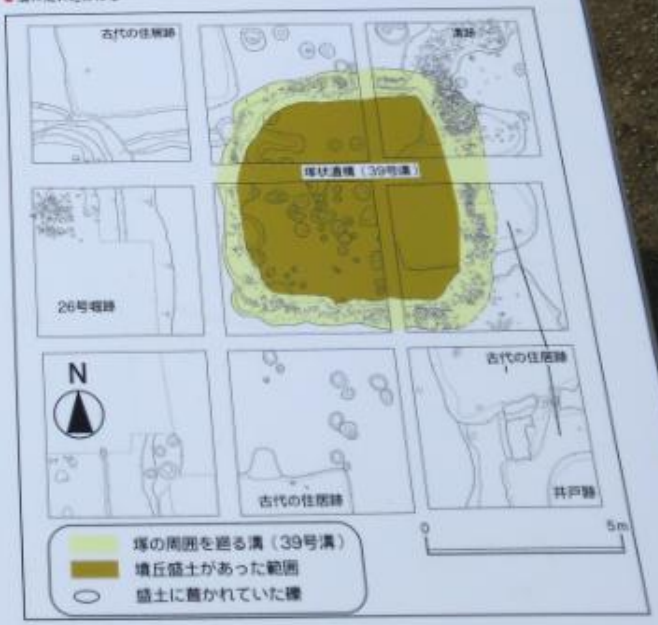
既に盛土が削平されているため、塚の上に構造物があったのかどうか、構造物があるとすればどのようなものであったのか明らかではありません。しかし、蔵骨器とみられる遺物の出土、河越氏の屋敷区画（8号堀区画）の北西角に位置する点を考慮すると、河越氏の屋敷区画の隅に造られた、祖先を祀る霊廟や納骨堂といった宗教的な役割を持った施設であると考えられます。

出土遺物の年代に13世紀～14世紀と幅があることから、途中に追葬等が行われた、存続期間の長い遺構だったのでしょう。

● 出土した捏ね鉢（左）・常滑壺（右）・古瀬戸入子（下）



● 溝に流れ込んだ礫



塚跡

河越氏の屋敷地を区画した堀
（8号堀跡）

この堀は13世紀～14世紀にかけて、河越館の一部を区画していました。最大上幅約４ｍ、下幅約0.5ｍ、深さ約２ｍを測り、規模は南北約75ｍ、東西約100ｍ、上戸小学校地内まで続く方形区画となります。土橋を有する区画南辺では、軸の異なる２条の堀が確認されており、当初は堀幅１～２ｍ程度だった北側の堀が、堀幅4ｍ程度に拡張され、さらに南側の堀へと付け替えられた様子がうかがえます。

● 堀跡（8号堀）

屋敷地堀跡

堀区画の外周を廻る道路

８号堀区画の外周には、中央部が踏み固められた幅４～５ｍの道路跡（１号通路状遺構）が検出されました。この道路を挟んだ西側には、８号堀区画（屋敷地の一部）と隣り合った別の区画（墓域か）も確認されています。役割の異なる複数の区画が並び、間を道路で連結する点が、河越館跡の空間利用の特色です。

道路跡と堀跡

山内上杉氏の陣所を区画した堀
（23・26・27・28号堀跡）

15世紀末～16世紀初頭頃、河越館跡には扇谷上杉氏の本拠地・河越城攻略のため、山内上杉氏によって陣所が築かれました。この堀は山内上杉氏の陣所に伴うもので、防御のため複雑に堀を曲げ、短期間で何度も堀の付け替えが行われています。

堀の肩には幾つものピット（柱穴）が検出されており、堀に沿って柵のようなものが作られていた様子がうかがえます。

整備では河越氏の時代に造られた堀と区別するため、舗装による平面的な表示にしています。

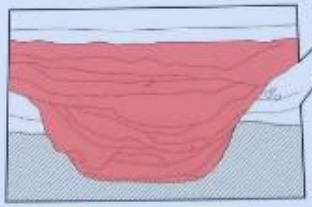
● 堀跡（26・27号堀）人の立っている所に柱穴が並んでいます

山内上杉氏陣所に伴う堀跡

堀跡の推定ライン

現存する土塁

※図中の堀は付け替え・拡張があり、同時に存在していた堀を示すものではありません。

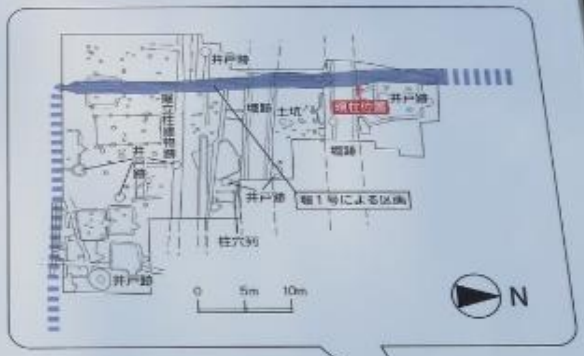


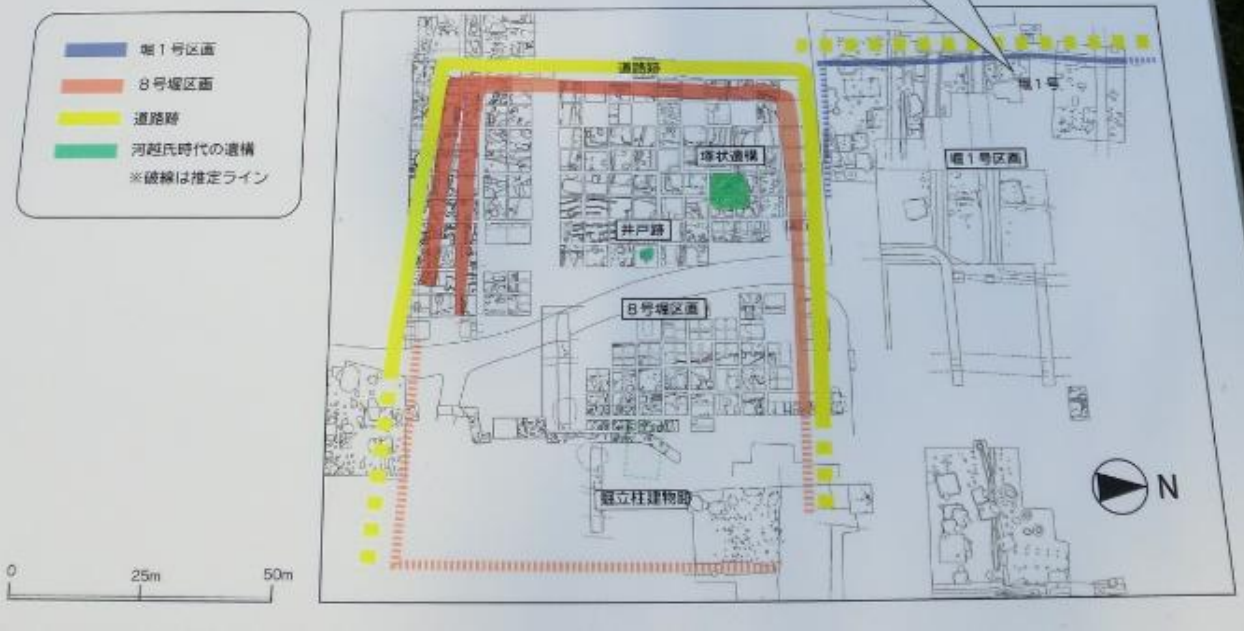
堀跡の断面形状

陣所堀跡

隣り合った堀区画
（堀１号跡）

この堀は13世紀頃の遺構と考えられ、南に隣接する８号堀区画の西辺とほぼ同一の軸上に位置しています。８号堀区画の北辺に沿って道路の痕跡が確認され、造られた時代や堀の軸が共通することから、この堀は８号堀区画とは道を挟んで南北に並ぶ位置にある、河越氏の屋敷地に関係した区画の一部と考えられます。





近接の堀跡

元の道路に戻って常楽寺に向かいます

常楽寺山門

「河越館跡」との表記

澤杉
後藤

鐘楼門

ふとう

二階に鐘楼がある

本堂

河越氏館址

平安末期から鎌倉時代にかけて、この
この地方に河越庄がおかれ荘官職父
氏の流れをくむ河越重隆を祖とする
一族だが、とりわけ河越太郎重頼と
の子三郎重員は鎌倉幕府で要職を占
めていた。この河越氏の居館のあった所
がこの場所で、時宗の常楽寺はもと河越
氏の持仏堂が発展したものと推定され
ている。かつて居館にめぐらせた方二町の
土塁のうち西北部分が現存する。昭和
四十六年以来数次にわたる発掘調査が
続けられ、全国的にみても極めて
稀な貴重な中世豪族の居館の全
容が漸次明らかになりつつある。

天気
送信
設定
印刷
セブンイレブン
長福寺
鯨井中
鯨井
雁見緑地
松崎ハイツ
JA
有泉さくら館
ローソン
小堤
高山商店
上戸
阿部風呂店
川越コンクリート工業
ハイツオビツA
雁見橋
ローズガーデン1
グリーンハイツ成田
釈迦堂
入間川
数野ハイツB
飯能信用金庫霞ケ関(支)
岸病院
Gステーションプロスパー
川越橋
天王公園
サミットストア
観音堂
大協鋼業
上戸緑地
小ヶ谷自治会館
川越市保健所
ガスト
霞ヶ関駅
霞ケ関高
上戸
300m
標準地図
街歩き
©2013 ZENRIN DataCom - 地図デー